

「数かぞえ」のバリエーション

藤田 芙美子

子どもの音楽行動を子どもの側から見る

私が子どもの音楽行動を子どもの側にたつて見つめるようになったのは、今から十八年前、東京都武蔵野市にある、すみれ幼稚園の五歳児クラスの子どもたちと毎週一日音楽活動を共にするという機会を得たのがきっかけでした。

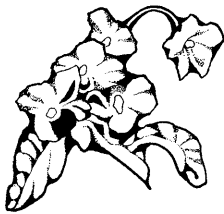
この幼稚園は、子どもの自主的な活動を大切に
する自由な保育を試みていましたので、子どもたち
を集めて一斉に何かを指導するということは、
ほとんどおこなっていませんでした。このような
保育の中で音楽的な環境を用意することは私に
とって大いに関心のあるところでした。子どもたち
が自ら音楽に関わる実際の姿を知ることができ

るのではないか、子ども中心の音楽教育の可能性についてヒントを得られるのではないかと考えたからです。

子どもたちと音楽活動をはじめるとあって、私は次のような指導の原則を自らに課すことになりました。子どもたちが自主的に関わるような環境や音楽を考えて用意するが、もし、子どもたちが関心を示さない場合はその計画を直ちに取り下げようというもの。しかし、子どもたちとの活動をはじめると間もなく、私が用意する音楽や音楽活動のほとんどは取り下げざるを得なくなりました。私が考えていた音楽や活動は、子どもたちと十分に気持ちを通わすものでないことが、どうしようもなく明らかになったからです。私は指導する以前にもっと子どもの音楽の仕方を知らなくてはならないと考えるようになり、指導を取り止めて、子どもたちと日常生活を共にする中で子ど

もたちの音楽の仕方を注意深く観察することになりました。観察を進めるうちに、子どもたちがお互いに気持ちを通わせて音楽的な表現を楽しんでいるのは、音楽の指導を受けている場面よりもむしろ指導を受けていない自由な活動場面であることが次第に明らかになってきました。自由な生活場面子どもたちは誰もが皆、生き生きと音楽、つくりを楽しみ工夫していました。

私は子どもたちが音楽する本来の姿をもっと確実にとらえたいと考えるようになり、以来、十数年にわたって、保育園、幼稚園の子どもの音楽性とその育ちを、社会人類学的な視点で観察する研究をおこなってききましたが、子どもの音楽活動をでき



るだけ子どもの側に立って観察するこの研究は、子どもが周囲の人々と関わって自ら音楽を学び、演じている実際、すなわち、日本の子どもたちが日本の文化社会の中で何を音楽的に学んでいるかの実際を明らかにしてきました。^{注1}

本稿では、この観察研究から、子どもたちの音楽行動のいくつかの実例を取り上げて、子どもたちが日常の生活の中で、どのように音楽的なものを学び、子ども社会の中で用いているのかについて具体的に説明したいと思います。

まずはじめに、日本の文化の内側に育つ子どもたちの音楽行動に一貫して認められる、音響を組織づけるための一定の方式があることについて述べましょう。

子どもの音楽づくりの基礎

私は、人は生まれると間もなく外界にある音響

を受け入れるようになり、次第にその音響を自ら組織づける方法を身につけるようになる、この音響を組織づける方法こそ人々の音楽づくりの基礎になるのだと考えています。^{注2} まず、話し言葉はどのようにして学ばれ、歌うこともまた話し言葉と深く関わって学ばれています。

子どもたちの音楽行動を注意深く見てみると、子どもたちは日本語の話し言葉を獲得すると同時に言葉の音響面をまとめてリズム・カルに唱えたり歌ったりすることを学び、さまざまに工夫し変化させていることに気がつきます。子どもが「数を唱える」実例をとりあげて説明しましょう。日本語の文化圏に住む子どもは、早ければ一歳から「いーち・にーい・さーん・しーい」のように数かぞえをするようになりますが、この数かぞえの音響面を今少し注意してみますと、子どもたちは、通常「いーち」をひと呼吸で発声し、この

ひと呼吸の時間単位を「い」と「ち」二つの音節

によって二等分し、拍節的に、そしてほぼ長二度の音程で唱えていることがわかります。私は、保育園の子どもたちの数かぞえが、年齢を増すにしたがって音楽的によいような変化を見せるかについて調べたことがあります。子どもたちは周囲の人々とさまざまな場面でのやりとりの中で数かぞえをする経験を重ねるにしたがって、数えることができる数の量を増すだけでなく呼吸配分の妙技を身につけ音響的にバランスのとれた見事な唱え言葉を作り出していることを知りました。子どもたちだけでなく私たち大人もまた基本的にはこのような日常生活の中でのやりとりを通して音楽的なもの、すなわち、音響を美しく心地よく組織づける方法を自ら学び、工夫しているのです。このように楽譜を用いることのない音楽の学習法を、ここでは仮に音楽の「直感的学習」と呼ぶこ

とにしましょう。

日常生活の中で使われている「数かぞえ」

子どもたちは、「数かぞえ」に見られるように、呼吸を整え、日本語の単語や音節のまとまりに従って言葉をリズムミカルに唱える方法を日々学んでいます。同時に、このようなリズムミカルな唱え言葉や唱え歌を子ども社会の中でさまざまな形で使い、機能させることも学んでいます。「数かぞえ」を異なった生活場面できざまに使いこなしている子どもたちの活動例^{注3}をとりあげて、子どもたちの心の動きを追って見ましよう。



一歳児の数かぞえ（ブランコに乗って）

一九九四年五月十六日 かなな 一歳七カ月

彩香 一歳六カ月

さわやかな五月の朝、一歳児クラスの子どもたちは、近くの公園に散歩に出かけました。かななちゃん、彩香ちゃん他三人の子どもたちは日当りのよいコーナーにある、四人乗りのブランコに乗りました。保育者が「ふうらん、ふうらん」と唱えながら、ゆっくりとブランコを押すと、ブランコの上のかななちゃん、彩香ちゃんも「ふうらん」「ふうらん」とつぶやいています。ブランコの上の子どもたちは、暖かい日差しを浴び、ブランコの動きに身をゆだねて心地よさそうな表情です。

保育者が、かななちゃんの座席の後ろにまわってブランコをゆっくり押しながら「いち・に・い・さーん・しーい・ごーお・ろーく・しーち・

はーち・きゆう・じゆう」と数をかぞえます。かななちゃんと彩香ちゃんが「さーん」から、保育者と声を合わせて唱えはじめます。かななちゃんは拍節ごとに頭を前に振りながら唱えています。

続けて保育者が「おまけの・おまけの・きしゃぼっ・ぼー・ぼーっと・なつたら・かわりましょ、ポッ・ポー」とリズムカルに歌うと、かななちゃんが「きしゃぼっぼー」の「ぼっぼー」から歌いはじめますが、まだ口がうまくまわりません。それでも最後の「ぼっぼー」は、しっかりとリズムにのって歌いました。

彩香ちゃんは、ブランコの真ん中の支柱にハマって、かななちゃんと、その背後でブランコを押している保育者と顔を見合わせて立っていました。保育者とかななちゃんが三回目の「おまけの・おまけの」を歌いだすと、保育者と顔を見合せ、歌の拍節に合わせて保育者の身振りと反対方

向に身体を左右に振りました。そして、かなちゃん、歌の最後のフレーズ「ぼっぼー」を、見事なタイミングで今度は一人で歌いました。保育者とかんなちゃんと彩香ちゃんは、声を合わせて数を唱えるという行為を通して、お互いに音楽的な時間を作り出すことを楽しんでいました。

☆まだ言葉の数の少ない一歳児。唱え言葉や唱え歌の言葉の意味は理解していませんが、お互いの呼吸周期を合わせ、言葉の音響面をまとめ、動作をまとめて拍節的に唱えることの心地良さを楽しんでいます。

三歳児の数かぞえ（消毒薬に浸かって）

一九九一年六月二十三日 直樹 三歳四ヵ月他
子どもたちは、プールに入る前に消毒薬が入った、たらいに腰まで浸かって数を十までひと息で唱えます。まだ数をしっかり覚えていない子ども

が多く、呼吸コントロールがうまくできないので、数を飛ばして唱える子どももいます。直樹くんは「いち、にい、さん、しい、ごくお、ろく、しち、はち、きゅっ、じゅ」と数えて、たらいから飛び出しました。途中、息が足りなくなつて「ご」と「お」の間で息継ぎをしました。この息継ぎは拍節の途中なので、音響的にはバランスをくずして不安定なものになりました。

☆子どもたちは消毒薬に一定時間浸かっていなければならぬという不快さを数かぞえをすることに
よって発散して
います。



四歳児の数かぞえ（かくれんぼ）

一九九二年八月三十一日 直樹 四歳六ヵ月

かくれんぼで、直樹くんは「おに」になり、椅子に座って、ハンカチを畳んだり広げたりしながら数を数えています。一から十一までは、ほぼ二度の音程間隔をもつ二音旋律で、一定のテンポを保って唱えています。十一を数え終わった時、「見てる、見てる」という女児の叫ぶ声が聞えてくると、キツとした表情になり、そのあとは一から二十七までをいくつかの数を飛ばして急テンポで数えあげます。隠れている子どもたちを早く見つけに行きたいという、いらいらした気持ちをあらわに表現しています。そこに「もういいよ」の声がかかり、直樹くんは素早く椅子から立ち上がって隠れている子どもたちを見つめるために走り出します。

☆「おに」は一定の時間、すなわち、他の子

どもたちが隠れるまでは目をつぶって他の子どもたちに聞こえるように大きな声で数を数えなければならぬという、子ども社会のルールを理解した数かぞえです。

＜ブランコの順番をまって＞

一九九二年八月三十一日 雅道 四歳六ヵ月

雅道くんは、ひさちゃんが乗っているブランコに早く乗りたくて仕方がありません。しかし、ひさちゃんのブランコ乗りは終わりそうにありません。雅道くんは、ブランコの支柱に寄りかかって、ひさちゃんに向かって歌いはじめました。

「いーち・にーい・さーん・よーん・ごーお・ろーく・しーち・はーち・きゅっ・じゅっ・おまけの・おまけの・きしゃぼっ・ぼー・ぼーと・なったら・かわりま・しょ」「ポッ・ポーで・おーし・まい」

☆この歌は、ブランコやトランポリンなどの

遊具で遊んでいる時に、順番を待っている子どもが交代を促す歌として保育園の生活の中で機能しています。子ども社会のルールを示す象徴的な役割を果たしています。

〈体操のかけ声〉

一九九二年八月三十日

「いちに・さんし・ごおろく・しちはち……」足を前に出して座り、爪先に両手を延ばして屈伸体操。

☆「数かぞえ」の拍節にのせて、身体運動をまとめています。

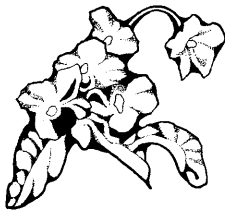
五歳児の数かぞえ（プール際で甲羅干しをしながら）

一九九二年七月二十七日 佳裕 四歳十ヵ月

プール遊びの中休み、子どもたちは、プール際に敷いたシートの上につぶせになって、それぞれに甲羅干しを楽しんでいます。保育者に百数えるまで日なたぼっこをするようにと言われて、子

どもたちはのんびりと声を合わせて数かぞえをしています。「いち、にーい、さーん……」。佳裕くんもまたみんなと一緒に大きな声で数えています。したが、「しち」になったところで「しち、はち、くう、じゅう」と、一語ずつ語尾をあげて、早口で一気に唱えました。次に、ちょっと考えたあと、ひと呼吸遅れて「ワン、ツウ、スリー、フォウ、……テン」と、これも早口で、見事な英語の発音で唱えました。はじめの数かぞえて、イントネーションを変えてみたことから、英語の数かぞえを思いついたようです。そしてさらに、今度はCMソングの「セブン・イレブン・いい気分」を連想して歌いました。

☆子どもは言葉遊



びの名人です。言葉の音響面をとらえてさまざまな発展を工夫しています。この場面の「数かぞえ」は、ある行動を一定時間続けるという約束ごととしても機能しています。

このように、子どもたちは既に一歳から、数を唱えることを学びはじめ、お互いの、あるいは自身の唱え方が心地良いものになるように、バランスのとれた美しい音響構成を作り出そうとしています。そして次に、このようにして自ら学習した数かぞえを、今度は生活の中でさまざまに使います。年齢を増すにたがって、その使い方は多様化します。四歳、五歳になりますと、数かぞえは身体運動をまとめたり、一定の時間単位を示すといった象徴的な役割を果たすために、それぞれのお互いの気持ちをコミュニケーションするために、さまざまなあり方で使い込まれるようになります。

子どもの音楽行動を二つの側面から考察してきました。一つは、子どもは言葉を獲得すると同時に、言葉の音響面を拍節的に旋律的にまとめる基礎的な形式（音楽的表現形式）を学んでいるという内的な側面です。いま一つは、この音楽的表現形式によって作り出される定型化された唱え言葉や唱え歌を社会のあらゆる場面で用いることを学んでいる、という外的な側面です。子どもたちにとって数を唱えるという行為は、基本的には自己の情動を解放する、あるいは、コントロールする手段であり、子ども社会の中では、楽しみ、コミュニケーション、美的創造、集団行動のルール、象徴^{注4}といったさまざまな役割（機能）を果たしていることがわかります。

（国立音楽大学）

注

1 Fumiko Fujita, *Problems of Language, Culture and the Appropriateness of Musical Expression in Japanese Children's Performance*, Tokyo: Academia Music. 参照

藤田美美子「幼稚園における様式化された話し言葉」他『日本保育学会大会研究論文集』一九八

八—一九七年、参照

2 See, Fumiko Fujita, *op. cit.*

この考え方は、英国の民族音楽学者、J・ブラ

ッキングの「音楽は人間によって組織づけられた

音響である」という音楽のとらえ方に基づいて、筆者が日本の子どもたちの音楽行動を観察した結果

得たものです。John Blacking, *How musical is man?* University of Washington Press, 1973.

(徳丸 吉彦訳『人間の音楽性』岩波現代選書、一九七八年) 参照

3 東京都東大和市にある、こひつじ保育園の子ども

たちの活動例です。筆者と国立音楽大学卒業研究

グループは、一九九一年から現在まで七年間にわ

たって、この保育園の子どもたちの音楽行動の観

察研究をおこなっています。

4 米国の民族音楽学者、A・メリアムは、音楽が人

間社会において果たしている役割(効用)を、情

緒表現、審美的享受、娯楽、伝達など、十の機能

としてまとめている。A. P. Merriam: *The Anthropology of Music*, Northwestern University Press 1964. (藤井知昭ほか訳『音楽人

類学』音楽之友社、一九八〇年) 参照

— 15 —